

■ 活動記録 ■

◆ 教育事業 ◆

2013年度先端社会研究所リサーチコンペ

【募集期間】：2013年4月18日～2013年5月24日

【リサーチコンペウィーク】：2013年6月10日（月）～2013年6月15日（土）

【公開プレゼンテーション】：2013年6月15日（土）

関西学院大学上ヶ原キャンパス先端社会研究所セミナールーム

◆開催の趣旨／リサーチコンペを振り返って

山口 覚（先端社会研究所所長）

本研究所では2010年度からリサーチコンペ事業を開始した。今年度で4回目となる。リサーチコンペは、申請された複数の研究課題の間で、研究助成の資格をかけてなされる競争である。計画書とプレゼンテーションによって自らの研究課題をいかに適切に示し得るかが問われる。申請者は大学院生ないし研究員という若手研究者に限られ、複数の申請者の中から選ばれた優秀者には一定額の研究助成がなされる。リサーチコンペの事業費は100万円であり、個人による申請の場合には最高20万円までの助成が認められている。つまり単純計算では5人までが採択者となり得ることになるが、100万円すべてを配分せねばならないという決まりはない。あくまでも「優秀」と認められた者だけを採択してきた。

リサーチコンペ採択者の研究成果は、研究生活を歩み始めた申請者自らにとって大切なものとなるはずである。しかしそれだけではない。リサーチコンペでは本研究所の研究上のキーワードである「他者問題」ないし「排除と包摂」をめぐる研究であることが求められる。それぞれの研究は本研究所にとっても重要なものとなるのである。リサーチコンペは実際に次のような文言をもって募集されている。

先端社会研究所が取り組む「大学院教育支援事業」の一環として、全研究科大学院生・研究員を対象に、先端社会研究所が取り組む「他者問題」に関して、将来の可能性が期待される「優れた先端的な研究」を募集する。そして、採択者に対しては、一定額の研究助成を行い、当該研究のより一層の発展を支援し、研究者の養成を図る。

上述した「優秀」という言葉は、「他者問題」や「排除と包摂」をかかげる本研究所から見て有意であるか否かにかかっている。言い換えれば、本研究所のコンペの選から漏れてしまった研究課題であっても、実際には優れた内容を持っている可能性は十分ある。ただ、それが他者問題といかに関係するかが不明瞭であれば、いかに優れた内容であってもコンペを勝ち抜くことはできない。

さて、2010年度に4名であった応募者は、翌11年度は10名、12年度は7名であった。今年度は8名であった。明暗を分けたのは当然ながら研究計画全体の出来不出来であったが、「他者問題」との関係が上手く提示できたか否かも重要なポイントとなった。以下では採択された5件の研究課題について簡単な講評をおこないつつ見ていこう。

昨年度までは社会学研究科の大学院生や研究員ばかりが採択されてきたが、今回はそれ以外の研究科から2件採択することができた。平英司氏（言語コミュニケーション文化研究科）の「ろう児をもつ家庭におけるコミュニケーションの分析－ろう児をきょうだいにもつ聴児の言語使用を中心に」は、家族と手話でコミュニケーションする兄弟姉妹を持つことで、一種のバイリンガル状況に置かれた子供を取り上げる。これまで取り上げられることの少なかった興味深い事例だと思われる。家族全体が社会的排除の対象となってしまう可能性があり、家族内部での関係も一筋縄ではいかない。社会関係の丁寧な記述が期待される。

寺島圭氏（文学研究科）の「権力者への正統性の付与は、自発的な協力行動を引き出すか－実験的手法による検討－」については、研究計画で言われる「他者問題」の扱いが本研究所の方針にどの程度妥当するかという点で議論が起こった。すなわち、社会心理学では当然かもしれない権力関係の徹底した抽象化、モデル化によって、現実社会の権力関係がどの程度解明できるのか、その点が聴衆の多くにとって不明瞭に思われたのである。これは社会心理学と社会学（や、それ以上に事実の積み重ねを重視する歴史学や地理学などの諸分野）との「他者問題」であったかもしれない。研究計画それ自体は良くできており、採択が決定された。研究成果によって他分野の研究者たちに研究手法の妥当性を示す必要がある。

その点で対照的であったのが谷岡優子氏（社会学研究科）の「地方花柳界における〈芸〉と〈色〉の境界線－諏訪湖沿岸部をフィールドに」である。宿場町、門前町から製糸業の盛衰を経た諏訪地域における花柳界への着目、「芸妓」と「娼妓」という時に反目し時に重複した2つのカテゴリーから他者性を分析しようとする枠組みのいずれも、非常に具体的に理解しやすいものであった。あとは現地において聞き取り調査などでどれだけ情報を入手できるかが問われようが、博士課程前期課程の1年生とは思われない充実した研究計画であり、おそらく良い成果を得られるものと期待される。

同じく前期課程1年生である小田二元子氏（社会学研究科）の「レズビアンのカルチャー研究－アメリカにおける研究との比較から」もまた、本研究所にとって親和性が高いと評された。プレゼンテーションではサブタイトルにある「アメリカにおける研究」について多く触れられず、それがいかに日本の事例と結びつくのかという問題をめぐる説明や、全体的な理論的展望についてもやや不十分であった。しかし理論面や調査手法をめぐって投げかけられた疑問点は、質疑応答においてかなり解消された。充実したフィールドワークが期待される。調査が上手く行けば面白い内容となるであろう。

山森宙史氏（社会学研究科）「戦後書店空間における「成人向けマンガ」の自主規制の変遷と「客体化される読者」に関するメディア論的研究」は後期課程3年生の研究テーマである。すでに関連する研究業績もあるためか、落ち着いたプレゼンテーションにおいて丁寧に研究計画が説明された。「成人向けマンガ」をめぐるとの書店の対応を「書店空間の分析」を通じておこなうというメデ

リア論的アプローチは興味深く、新たな研究成果が確実視されてもいる。他方では「書店空間」の外部についての目配りも必要であろうとの懸念が示された。小さくまとまり過ぎないように留意することが求められよう。

以上が今年度採択された5件の研究テーマの概要と、その簡単な講評である。なお、今回のリサーチコンペでは残念ながら不採択となってしまった研究課題にも見るべき点は多々あった。ただ「他者問題」との関係を示すことに必ずしも成功しなかったか、「他者問題」という語と結びつけることがそもそも困難な研究課題であった可能性がある。その点を考慮に入れて次年度に改めてチャレンジしてもらえれば大変嬉しく思われる。

あるいは、この文章では「競争」の部分をいささか強調してきたが、本当に大切なのは競争それ自体ではない。研究計画を練り、それを計画書にまとめ、プレゼンテーションと質疑応答をおこなって他の研究者たちと議論するという一連の行為を積み重ねていくことは、すべての研究者にとって不可欠である。それをいくらか緊張感のあるスタイルで実施しているのがこの事業なのである。その意味でも、リサーチコンペの機会が有効利用されることを期待したい。

最後に、本事業でお世話になっております先生方に厚く御礼申し上げます。また、本研究所の「身内」ではあるものの、この事業を実質的に支えてもらっている専任研究員・RAの皆さんにも、この場を借りてお礼申し上げます。

以下は、採択者の「研究計画申請書」である。参考としていただきたい。

◆採択された研究計画要旨

◎ろう児をもつ家庭におけるコミュニケーションの分析

—ろう児をきょうだいにもつ聴児の言語使用を中心に—

平 英司（言語コミュニケーション文化研究科大学院研究員）

日本手話が、日本語とは異なる文法体系を有し、ろう者にとって最も理解ができ思考の道具となる第一言語であるということは多くの研究により述べられるようになってきた。しかしながら、公立の聾学校（聴覚特別支援学校）では、十分な手話能力を有しろう児に対し日本手話で授業が行える教員は1%に過ぎない。また、家庭においてもろう児をもつ聞こえる親のうち日本手話が堪能な者はほとんどいない。このような状況のなか近年、東京を中心に「日本手話がろう児の第一言語である」とし日本手話での養育を行う親たちが出現し始めた。そして、2003年にはろう児の人権救済申立がなされ、2008年には日本で唯一日本手話を教育言語とする私立のろう学校「明晴学園」が誕生する。そのような家庭では、ろう児のきょうだいにあたる聞こえる子どもたちは、日本手話と日本語という2つの言語環境に触れることになる。本研究では、ケーススタディーにより、2つの異なるモダリティ（視覚／聴覚）による言語に同時に触れる聞こえる子ども達が家庭においてどのようなコミュニケーションをとるのかを明らかにし、今後のろう児をもつ家庭の言語のあり方への検討に寄与するものである。

◎権力者への正統性の付与は、自発的な協力的行動を引き出すか

－実験的手法による検討－

寺島 圭（文学研究科博士課程前期課程2年）

あらゆる社会集団には、何らかの意思決定を行う人とそれに従う人というように、地位の差が存在する。このような状況で低地位者（＝非権力者）は、高地位者（＝権力者）に集団やその成員に利益をもたらすような行動を期待する。そのため、権力者のパフォーマンスが非権力者の期待に沿うような高いものではない場合、権力者と非権力者の間に対立が生じる。たとえば、政府が国民の利害を十分に考慮できていない政策を行えば、国民の反感は強まる。こうした「権力者のパフォーマンスの低さが非権力者の反感や不満を生じさせること」を一種の「他者問題」と捉える。

本研究では、この「他者問題」が容易に解決されない背景として、人々が持つ権力者の支配を適切だとみなす心理的傾向を想定する。この傾向は古くから正統性（legitimacy）の認知問題として議論され、権力者に対する非権力者の自発的な協力的行動を引き出すことが知られている。本研究では、低パフォーマンスの権力者でも正統性が付与されれば非権力者からの自発的な協力が得られることをゲームを用いて実証的に示し、正統性認知による権力者と非権力者の間の「他者問題」の解決遅延について議論する。

◎地方花柳界における〈芸〉と〈色〉の境界線

－諏訪湖沿岸部をフィールドに－

谷岡 優子（社会学研究科博士課程前期課程1年）

近年、日本各地において、地域の伝統芸能文化をいまに伝える存在として「花柳界」が取り上げられ、観光・地域おこしなど、多様な文脈でその活動が脚光を浴びている。

この花柳界は、〈芸〉を売る存在である「芸妓」と、〈色〉を売る存在である「娼妓」を中心に、「置屋」・「検番」・「割烹料亭」という三業を伴って構成される社会である。現在の日本の花柳界では〈色〉を売る娼妓はもはや存在せず、〈芸〉を売る芸妓のみで構成されており、両者の境界線ははっきりと引かれている。

しかし、その歴史を辿れば、花柳界内部の〈芸〉と〈色〉の境界線は、非常に曖昧なものであり、土地によって〈芸〉と〈色〉の空間的住み分けが行なわれる場合、時代によって〈芸〉と〈色〉が比重を変わる場合、そして個人の意思によって〈芸〉を売るか〈色〉を売るかを変える場合など、その境界線の有様はさまざまであったことが推測される。

本研究では、かつて芸娼妓が存在し、現在も花柳界が存続する長野県諏訪湖沿岸部をフィールドに、諏訪花柳界での〈芸〉と〈色〉の境界線変動のあり方、そしてその当事者たちによる〈色〉の「他者化」の様相、その場で行なわれてきた〈色〉をめぐる「排除」と「包摂」に関して調査を行なう。

◎レズビアンのカルチャー研究

ーアメリカにおける研究との比較からー

小田二 元子（社会学研究科博士課程前期課程1年）

レズビアンに関して、その存在や、彼女らの恋愛は、ヘテロセクシャルや、同じセクシャルマイノリティである男性同性愛と比較しても社会的認知の度合いが低いのではないかと考えられる。申請者は、そうした、不可視性をもつ彼女たちの恋愛に関して、実際にレズビアンバーを訪れ、そこを訪れる人や、そこで働く人々と関係を結ぶことを通して、彼女たちの恋愛と、レズビアンバーという空間について調査してきた。そこで明らかになったことは、レズビアンバーという空間が秘密結社的な性格を持つということ、そして、彼女たちがコード化された隠語を用いたコミュニケーションにより、外部と隔絶した独自の空間を形成することで、自由に自身のアイデンティティ・カテゴリーという類型の理念系を役割として演じているということである。本研究では、上記の調査を継続しながら、今後は類似性の見られるアメリカにおけるレズビアンのカルチャーとの比較を行うことで、日本におけるレズビアン・コミュニティやカルチャーに関する考察を行っていく。

◎戦後書店空間における「成人向けマンガ」の自主規制の変遷と「客体化される読者」に関するメディア論的研究

山森 宙史（社会学研究科博士課程後期課程3年）

本研究は、新刊書店における「成人向けマンガ」出版物をめぐる自主規制措置のメディア史的分析を通じ、「有害図書」の社会的構築過程と出版メディア規制において後景化する〈客体化される「読者」〉の存在を顕在化することを目的とするものである。

近年、性表現を主に取り扱う「成人向けマンガ」に対する公的規制の風潮は年々強まっている。この問題に対しては、これまで「性表現」の是非を問う議論が多く提起されてきたが、実質的な規制措置として産業独自の論理のもと展開される「自主規制」の内実に関しては十分に検討されてきたとは言い難い。とりわけ、90年代の「有害コミック」問題以降、その在り方は書店空間を中心に先行する自主規制の方法そのものに対する自己目的的な制度的見直しが主眼となり、むしろそこから規制されるべき対象としての成人向けマンガとその受け手象が再定義されている状況が観察される。

そこで本研究は、成人向けマンガ出版物をめぐる自主規制が戦後の書店空間においてどのような技術的変容を伴って展開されてきたのかを明らかにし、その際の「読者」（非読者も含む）がいかなる存在として書店側に仮定されてきたのかを考察することを試みる。